
心の音

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の音

【Nコード】

N6567E

【作者名】

日向葵

【あらすじ】

野地のなにげない言葉に、晶子の心が「おと」をたてる。「失恋」の続きものです。

「なんかこのお菓子おもしろくない？」

「え？」

帰り支度をしていたら、突然野持さんに話しかけられた。驚いて振り向くと、先ほどサークルのメンバーからもらったお土産をにゅつと突き出す。

「それなら、さっき私ももらいましたよ。」

なんてことはない、よくあるりんごケーキなんだけれど、

何が気になってるのか、野持さんは面白そうにその個装された一口サイズの

お菓子をくるくると手の中で弄び、それから私を見てにゅつと笑った。

「メモリアル・ピュア・ケーキっていうんだって。」

すごいネーミングだね、とあごに手を添え、野持さんがうんうんと一人頷く姿に

思わず笑ってしまった。

メモリアル・ピュア・ケーキ…確かにそれはすごいネーミングかもしれない。

「思い出が詰ったケーキなんですかね。」

面白いからつい調子を合わせて受け答えると、野持さんは腕を組み、

難しい顔をしながら言った。

「食べると、いろんなことを思い出すケーキなのかも。人によって味が違うんだよ、きつと。」

「甘ずっぱかったり、ほろ苦かったり…。」

「ほろ苦いのはちょっと嫌だな。」

「だね。」

顔を見合わせたままちよつと間があいて、そして次の瞬間、二人でふき出した。

「汗と涙の味もあるかもしれないよ？」

「それってしよっぱいの？」

「うわゝもう食べれない！！」

こうなったらとまらない。

お腹を抱えて大笑いをしていたら、さすがにもう片付けてとサークル長の佐野さんに怒られてしまった。

「もゝ、野持さんが笑わせるから怒られちゃったじゃないですか。」

佐野さんにもたされた備品をよっこらせと持ち上げ、

まだ涙目な横目で野地さんを軽く睨むと、悪い悪いと口先で軽く謝るだけで全然悪びれない表情のまま、私の荷物に、どれ、と手をかけた。

持つてくれるの？という淡い期待をすぐさま打ち破り、

その手に体重をかけたからさあ大変、荷物の重さが倍増し思わずよろけてしまった。

「野地さん!!」

「ああ、「ごめん。もっと重くしたらどうなるかなって思ってた。」

しれっと言う野持さんは満面の笑みで、不覚にもどきっとしてしま
った私は

くやしくて彼のひざを軽くけりつけた。

側でやりとりを見ていた佐野さんが野持さんに「おいおい、いじめ
は駄目だぞ」

と笑いながら諫めたが、野持さんはけろりとして言った。

「愛情表現ですから。」

その言葉を聴いて、心の中でことりと何かが音をたてた。
わかってる。

彼にそんなつもりはないってことも、
大事な彼女がいるってことも

それでも嬉しくなってしまう自分がそこに居て
どうしようもなくなる。

もうやめよう。

何度もそう思っていたはずなのに

あんな風に二人で笑いあったり、話したりすると
心がどうしようもなく音をたてて動くんだ。

重症だなあ

そっと嘆いて、

さつきもらったお土産のケーキを口にほおりこむと、
ほろ苦い味が口いっぱいに広がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6567e/>

心の音

2010年11月20日02時58分発行